〔論　文〕

身体接触における文化の影響 [1)]

曺　　美　庚

目　的

対人コミュニケーションのかなりの部分は非言語メッセージによって行われる。非言語コミュニケーションの研究者であるバードウィステルは，二人の会話の65％が動作やジェスチャーなどの非言語によるものであると報告しており，心理学者マレービアンも，人から受けるインパクトの実に93％が言語以外のメッセージからくることを明らかにした（原沢，2013）。なかでも，非言語コミュニケーション手段の一つである身体接触は，もっとも直接的に自分の存在を相手に伝える原初的な伝達形態であると同時に，コミュニケーションのもっとも基本的な方法といえる（e.g., Argyle, 1988; 大坊，1998; Gallace & Spence, 2010; Hertenstein, Holmes, McCullough, & Keltner, 2009; Montagu, 1978）。

Barnlund（1973）は，日本とアメリカの２つの文化の人々が，どの程度頻繁に接触しあうか，誰に触り，誰との接触を避けるか，接触の場合，身体のどこであるか，また男女のコミュニケーション形式が接触行為において異なるか否かなどを調査した身体接近度（body-accessibility）調査を行った。そして，その結果をもとに，両文化の間で身体への接近度において顕著な差があるとし，ほとんどの対象において，アメリカ人が日本人より２倍も多く身体的接触を用いていることを明らかにした。このような結果に対する解釈の一つとして，アメリカ人は表現が多く，くだけて，形式ぶらず，よく主張し，言葉で自己を露出する積極性があるため，気持ちを明確にしたり伝達する方法として，自然で親密な身体的表示の機会をより多く用いる反面，日本人は改まっていて遠慮がちであり，つかみどころがなく，よそよそしく，言葉による表現がそれほど多くないため，内面の気持ちを過度に露出することを防止すべく，身体の接触回数や接触部位を最小限にしておくのではないかと主張している（Barnlund, 1973）。こうした調査結果と解釈は，異文化理解や異文化コミュニケーションの場面において重要な意味を持つ。というのは，各々の文化内で許容されている身体接触の度合いに差があるのであれば，その違いを把握することは，異文化理解の促進，ひいては異文化コミュニケーションの円滑化に欠かせない要因となりうるからである。

本研究は，身体接触に関する古典的な研究であるJourard（1966）の研究と，それを応用し日米比較の形でまとめたBarnlund（1973）の研究を踏まえた上で，同じアジア文化圏に属する２つの国，日本と韓国における身体接触の度合いの異同を分析し，異文化コミュニケーションとの関連で新たな知見を見出すことを目的とする。その際，身体接触に関する日韓の直接比較に加え，Jourard（1966）によって得られた米国のデータを基準とした日米・米韓比較を併せて行うことで，日本と韓国における身体接触行動の特異性をも明らかにしたい。

もっとも，米国データは，アメリカの大学生を対象に行われたJourard（1966）の調査結果に基づいており [2)]，日本と韓国のデータは，Jourard（1966）の調査方法と同様の形で行われた現在の調査データであるため，日韓の現在の

無断転載禁止

調査データを米国の半世紀前の調査データと比較しなければならないという限界があり，結果の解釈に際しては細心の注意が必要である。というのは，近年のインターネットやSNS等の発達により，人々が直接対面する機会や対面時に接触を介するコミュニケーションを行う機会が著しく減ってきている可能性を排除できないからである（Gallace & Spence, 2010）。この点を考慮すると，米国データとそれを用いた分析結果については，対人コミュニケーション環境の経時的変化をも考慮し，かなりの程度割り引いて考える必要があろう[3)]。このような限界にもかかわらず，米国データを基準として分析に含める狙いは，身体接触に関する文化間比較に一層深みが増すことを期待するからである。

方　法

質問紙調査

本研究のために，日本と韓国において2回にわたる質問紙調査を行った。1回目の調査は，2012年9月から12月の間，2回目の調査は2013年9月から2014年1月の間に実施しており，日本は関西地方の2つの大学の学部生350名を対象に，韓国はソウル市と大邱市の6つの大学の学部生375名を対象に調査を行った。父親あるいは母親がいないと回答した学生を除外し，最終的に日本316名（男子136名，女子180名，平均年齢＝19.60歳，*SD* = 1.22），韓国325名（男子151名，女子174名，平均年齢＝20.86歳，*SD* = 1.72）を分析対象とした。

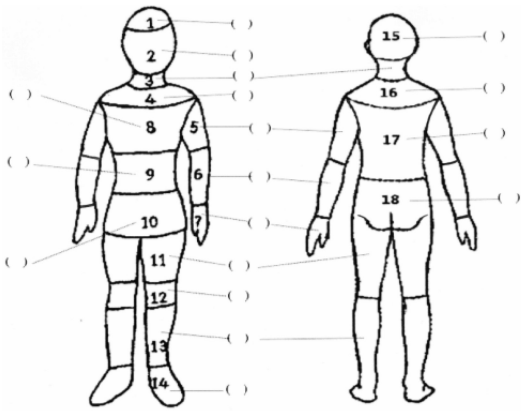


Figure 1　身体接触調査のための身体図

調査方法としては，人間の身体を24分割しているJourard（1966）の身体接近度質問票を修正した18分割図を用い[4)]，調査協力者に対し，日常生活の中で両親や親友と過去1年間にどの程度のタッチの授受を行ったかを調査する形で行われた（Figure 1）。その際，タッチの授受を行う相手の提示順番をランダムに配置することで，カウンターバランスがとれるように配慮した。

Jourard（1966）の身体接近度スケールについては，Barnlund（1973）も指摘しているように，身体接触を鋭敏に確実に測定できる方法であることが立証されており，その後の研究においても多くの研究者によって援用されている（e.g., Rosenfeld, Kartus, & Ray, 1976; Nguyen, Heslin, & Nguyen, 1976; Hutchinson & Davidson, 1990）。

分析方法

調査結果については，概ね3つの分析を行っている。まずは，身体の全18部位のうちいくつの部位にタッチがあったかについて，日本と韓国の間で相違があるか否かを比較するのが1つ目の分析である。これは，身体接触の範囲がどのくらい広いかを比較するための分析である。2つ目の分析は，18部位の各々に対して，大学生の何％がタッチの授受を報告しているかという観点からの比較分析である。この分析によって，日韓においてもっともよくタッチする，あるいはタッチされる（タッチを許容する）部位はどこかというのが明らかとなる。そして，最後の分析では，上記の2つの分析結果がどのくらい特異なものであるかを知るためのヒントとして，第3の文化としてアメリカを取り上げ，アメリカとの比較という観点から日本と韓国における身体接触のレベルの客観的な把握を図る。米国データを基準とした3ヵ国の比較から，日本と韓国の相対的な位置づけ，ならびに

無断転載禁止

特異性が示されることになる。

結　果

「タッチする」と「タッチされる」間の相関関係

身体接触の度合いを調査する質問紙では，自分から相手にどの程度タッチしたかに加え，自分が相手からどの程度タッチされたか（すなわち，相手のタッチをどの程度許容したか）を同時に質問している。身体接触の度合いの高い人は，相手によく「タッチする（touch）」人であると同時に相手からもよく「タッチされる（touched by）」人であると考えられるからである。そこで，「タッチする」の得点と「タッチされる」の得点間の相関を分析することで，尺度の一貫性を検証することにした。

Table 1 に見るように，日本の場合，同一対象とのタッチの授受については，男女ともに「タッチする」と「タッチされる」の間には高い正の相関がみられた（いずれも，$p < .001$）。女子学生の場合，父親との間で相対的に低い相関（$r = .64$, $p < .001$）が見られ，異性の親友との間でもっとも高い相関（$r = .94$, $p < .001$）が示された。反面，男子学生の場合，母親との間で相対的に低い相関（$r = .73$, $p < .001$）が見られ，父親や異性の親友との間でもっとも高い相関（いずれも，$r = .95$, $p < .001$）が示された。ただ，男子学生と父親との間の高い相関は，両者の間で授受されるタッチの絶対量が非常に少ないことにも原因があることを踏まえておかなければならない。一方の韓国の場合も，日本同様に，同一対象とのタッチの授受について，「タッチする」と「タッチされる」の間には高い正の相関がみられた（いずれも，$p < .001$）。男女ともに父親との間で若干低い相関係数（$r = .46$, $p < .001$; $r = .58$, $p < .001$）を示しているが，それ以外の対象とは非常に高い相関となっている（Table 2）。

また，同一対象ではない場合でも，「タッチする」と「タッチされる」の間には正の相関があることが分かる。例えば，日本の男子の場合，母親によく「タッチする」ほど，母親からよく「タッチされる」ばかりでなく，母親以外の対象，すなわち，父親や同性の親友からもよく「タッチされる」傾向があることがデータからは

Table 1　「タッチする」と「タッチされる」間の相関係数（日本 $N = 148$）

			Touch				Touched by			
			母親	父親	同性親友	異性親友	母親	父親	同性親友	異性親友
Touch	母親	M	–	.64***	.49***	.20	**.73*****	.49***	.45***	.15
		F		.35**	.37**	.22	**.71*****	.27*	.30**	.10
	父親	M		–	.52***	.30*	.82***	**.95*****	.49***	.28*
		F			.27*	.21	.34**	**.64*****	.35**	.13
	同性親友	M			–	.19	.60***	.48***	**.85*****	.15
		F				.09	.56***	.32**	**.92*****	.05
	異性親友	M				–	.24*	.27*	.28*	**.95*****
		F					.25*	.19	.11	**.94*****
Touched by	母親	M					–	.78***	.54***	.19
		F						.36**	.49***	.17
	父親	M						–	.47***	.26*
		F							.37**	.16
	同性親友	M							–	.27*
		F								.06

note. 全体の相関を検討するために，異性親友がいないと答えた人は分析から除いた。
M（male）= 67，F（female）= 81，
* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

Table 2　「タッチする」と「タッチされる」間の相関係数（韓国 N = 169）

			Touch				Touched by			
			母親	父親	同性親友	異性親友	母親	父親	同性親友	異性親友
Touch	母親	M	–	.35**	.52***	.18	**.71***	.24*	.58***	.28*
		F		.52***	.50***	.28**	**.77***	.49***	.48***	.16
	父親	M		–	.49***	.09	.13	**.46***	.47***	.12
		F			.39***	.31**	.39***	**.58***	.43***	.22*
	同性親友	M			–	.21	.50***	.28*	**.81***	.27*
		F				.43***	.47***	.40***	**.88***	.27*
	異性親友	M				–	.19	.19	.22	**.89***
		F					.32**	.43***	.40***	**.85***
Touched by	母親	M					–	.31**	.59***	.31**
		F						.53***	.42***	.23*
	父親	M						–	.45***	.26*
		F							.37***	.36***
	同性親友	M							–	.32**
		F								.27**

note. 全体の相関を検討するために，異性の親友がいないと答えた人は分析から除いた。
M（male）= 78，F（Female）= 91
* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

読み取れる（$r = .49$, $p < .001$; $r = .45$, $p < .001$）。このような相関関係については，日本の男女のみならず韓国の男女においても概ね同様の正の相関が見られる。ただし，異性の親友とその他の対象（つまり，母親，父親，同性の親友）との間で直接的な相関関係が認められないのは，異性の親友に対するタッチ行動と，その他の対象に対するタッチ行動が異質なものである可能性があることを物語る結果といえる。すなわち，前者に対するタッチには性的な意味合いが含まれかねないからであろう。

以上，同一対象との間では，「タッチする」と「タッチされる」の間に高い正の相関があることを明らかにした。両者間の高い正の相関の存在は，タッチの水準を測定する尺度に一貫性があることを意味すると同時に，一方を分析することで他方についてもかなりの確率で予測が可能であるということを示唆するものである。そこで，以下の議論においては，Jourard（1966）やBarnlund（1973）の研究結果との比較可能性を高めるべく，自分から相手に「タッチする」ほうではなく，自分が相手から「タッチされる」ほうの身体接触を中心に調査結果をまとめていきたい[5]。

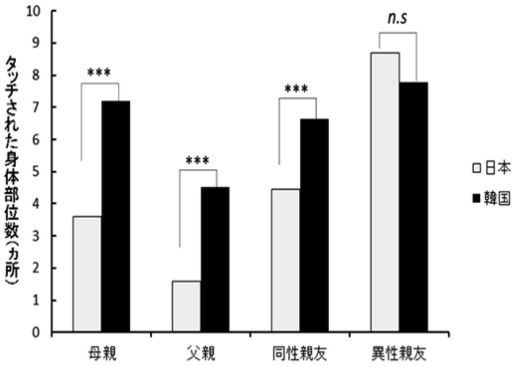
分析 1　身体接触範囲の差

本研究で用いられた身体図は人間の身体を24分割したJourard（1966）のモデルを18分割に修正したものである。日韓の大学生らは，自分たちの母親，父親，同性の親友，異性の親友の身体に直近1年間でどの程度タッチしているのだろうか，あるいはタッチされている（タッチを許容している）のだろうか。

Figure 2はその調査結果をまとめたものである。タッチの得点は，全18部位のうち何ヶ所に「タッチされた」かという，タッチ部位数を表しているため，それを平均した値も0～18の間にある。Figure 2から，日本と韓国の間で，大学生（男女合わせて）が自分の母親，父親，同性の親友から「タッチされる」部位数には大きな開きがあり，いずれも韓国の大学生が日本の大学生よりも平均値が有意に高いことが分かる（$t = 10.93$, $p < .001$; $t = 10.90$, $p < .001$; $t = 6.80$, $p < .001$）。このような傾向については，「タッチする」の場合も概ね同様の結果が得られた（$t = 11.57$, $p < .001$; $t = 8.92$, $p < .001$; $t = 7.72$,

$p < .001$)。

さらに，男女を区分して個別に分析しても，Table 3 のとおり，母親，父親，同性の親友との間で，「タッチする」部位数と「タッチされる」部位数の平均値には，男女を問わず日本と韓国の間で有意差が認められ，相対的に日本の身体接触の度合いが低いことと，逆に韓国の身体接触の度合いが高いことが明らかとなった（いずれも，$p < .001$）。ただ，異性の親友については両国間でほとんど差は認められず，男女を区別して分析を行っても相変わらず有意な差は見られなかった。異性の親友とのタッチ行動は他の対象とのタッチ行動とは異質な様子を呈していることを示唆する結果といえる。一方，母親，父親，同性の親友との身体接触においては，同一国内の男女間でもその度合いに大きな違いが表れており，Table 3 に見るように，日韓ともに女子が男子よりも明らかに接触範囲が広いことがうかがえる（$p < .05$）。特に母親とのタッチの授受において顕著な差が見受けられる（日本は，$t = 7.82$, $p < .001$; $t = 8.28$, $p < .001$ であり，韓国は，$t = 6.48$, $p < .001$; $t = 4.46$, $p < .001$ で



note. 異性親友の部分の分析においては，異性の親友がいないと答えた人は分析から除いた。
日本 $N = 316$（異性親友あり 148）
韓国 $N = 325$（異性親友あり 169）
*** $p < .001$

Figure 2　身体接触範囲における日韓差

Table 3　身体接触範囲における日韓の差

			日本	韓国		
			M（*SD*）	*M*（*SD*）	*df*	*t*
Touch	母親	M	1.56（3.07）	5.38（4.13）	285	8.82***
		F	4.52（3.53）	8.52（4.56）	352	9.25***
	父親	M	1.36（2.84）	3.74（3.88）	285	5.88***
		F	2.27（3.00）	4.99（4.25）	352	7.0 ***
	同性親友	M	3.92（4.12）	6.35（4.62）	285	4.67***
		F	4.97（3.23）	7.49（3.91）	352	6.61***
	異性親友	M	9.34（6.91）	9.04（5.43）	143	−.30
		F	8.10（6.16）	7.26（4.93）	170	−.99
Touched by	母親	M	1.82（2.82）	6.02（4.32）	285	9.65***
		F	4.97（3.69）	8.22（4.53）	352	7.41***
	父親	M	1.29（2.70）	4.07（4.02）	285	6.80***
		F	1.82（2.61）	4.91（3.95）	352	8.73***
	同性親友	M	3.81（4.50）	5.87（4.35）	285	3.94***
		F	4.95（3.40）	7.31（3.89）	352	6.07***
	異性親友	M	8.72（6.78）	8.30（5.55）	143	−.41
		F	8.67（6.23）	7.32（5.12）	170	−1.56

note. 異性親友の部分の分析においては，異性の親友がいないと答えた人は分析から除いた。
日本 $N = 316$（M = 136，F = 180）
韓国 $N = 325$（M = 151，F = 174）
*** $p < .001$

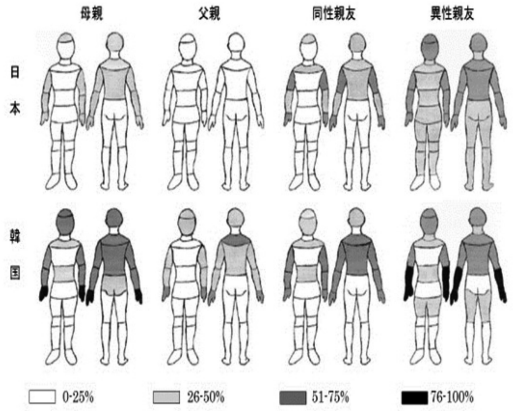
無断転載禁止

ある)。

分析 2　身体接触水準の差

次の分析は，身体18部位のうちのどの部位をよくタッチされるのかに関する分析である。そのため，各対象（母親，父親，同性の親友，異性の親友）から各身体部位ごとに大学生の何％がタッチをされたかを調査した後，その％の高低によって身体図に色（濃淡）を付けることにした。レベルの区分は，25％刻みで4段階に分かれており，レベルⅠ（0-25％）からレベルⅣ（76％-100％）に上がるほど濃い色になるよう色を付けている（Figure 3）。この方法は，Jourard（1966）やBarnlund（1973），Rosenfeld et al.（1976），Nguyen et al.（1976）などの研究でも使用された方法であり，視覚的に身体接触の度合いを理解するのに非常に有効である。

Figure 3は，日韓の大学生が，母親，父親，同性の親友，異性の親友などの対象者からどのくらいタッチされたかを表すものである。日韓間の差は一目瞭然であり，とりわけ，日本の大学生は父親からはほとんどタッチされていないという結果が出ている（すべての部位がレベルⅠ）。反面，韓国の大学生の場合，頭，顔，肩，腕，背中，手を中心にかなりのタッチが見られ，相対的に身体接触のもっとも少ない相手である父親からもかなりのタッチを受け入れている様子がうかがえる。一方，母親からのタッチにおいては，日本の場合も頭，背中，腕などを中心にレベルⅡのタッチが確認されているが，韓国の大学生に比べるとタッチ水準は明らかに低いといえる。後者の場合，母親から頭，顔，腕，肩（後ろ），背中などへのタッチはレベルⅢという結果となっており，手に至っては最高レベルであるレベルⅣに達しているなど，韓国の場合，母親からのタッチ水準はかなり高いことが分かる。



note. 日本N = 316（M = 136，F = 180）
韓国N = 325（M = 151，F = 174）
異性親友の部分の分析においては，異性親友無しの者は分析から除外。

Figure 3　身体接触の部位－両親，同性・異性の親友による被接触強度

さらに，同性の親友からのタッチにおいても，日本はレベルⅡとⅢを合わせて8ヶ所（レベルⅡが6ヶ所，レベルⅢが2ヶ所）である反面，韓国はレベルⅡとⅢを合わせて10ヶ所（レベルⅡが5ヶ所，レベルⅢが5ヶ所）という結果が出ており，韓国の方が日本よりもやや広範囲に，しかも高い比率でタッチが行われている様子が読み取れる。反面，異性の親友からのタッチについては，必ずしも一方が他方よりタッチ水準が高いとはいえない。このような結果は，前述したように，異性の親友との身体接触は，それ以外の相手との身体接触とは異質なものである可能性を示唆するものである。

一方，性別差を考慮した日韓比較からは，日本の男子のタッチ行動と関連し注目すべき特徴が浮き彫りとなった。日本の男子大学生とその両親との間に身体接触が極端に少ないのである。父親に「タッチする」と父親から「タッチされる」のいずれにおいても，タッチ水準がレベルⅠを超えた部位は皆無であったばかりでなく，母親との身体接触においても，レベルⅠを超えた部位は肩（後ろ）の部位のみで，残り17ヶ所へのタッチ水準はいずれもレベルⅠに留まっている。日本の男子の両親との身体接触がいかに少ないかを物語る結果といえる。ただし，日本の女子学生においては，両親との身体接触の度合いが男子学生ほど極端に少ないわけではない。

無断転載禁止

ここまでの分析結果を踏まえると，性別差と文化差をともに考慮した場合，タッチ水準は，日本男子＜日本女子＜韓国男子＜韓国女子の順に高まり，身体接触の対象者で見ると，父親＜母親≒同性の親友＜異性の親友の順に高まっていることが確認できる。また，日韓を問わず，両親は息子より娘により多くタッチする傾向があることがうかがえる。とりわけ，日本の場合，両親と息子の間の身体接触は非常に限られたものになっているという事実はすでに指摘した通りであり，注目に値する。

分析 3　身体接触における日韓の特異性

身体接触の範囲がどのくらい広いかについて日韓比較を行った分析 1 と，身体18部位の各々に対して大学生の何％がタッチの授受を行っているかという，身体接触の水準を比較した分析 2 から，韓国の大学生の方が日本の大学生より身体接触の範囲も広く，身体接触の水準も高いという結果が導かれた。これら 2 つの分析結果がどのくらい特異なものであるかを知るために，第 3 の文化を代表するものとして米国データを取り上げ，米国データとの比較という観点から日本と韓国における身体接触の水準を客観的に把握しようというのが分析 3 の狙いである。米国データを基準とした 3 ヵ国比較から，日本と韓国の相対的な位置づけ，ならびに両国の特異性を明らかにすることができると考えている。

分析 3 では，Jourard (1966) による米国データを基準とし，筆者によって得られた日本と韓国のデータ[6)]をその基準と比較する形で分析が行われた。具体的には，米国データを中心に据え，日米間で18部位の各々に対して，母親，父親，同性の親友，異性の親友との間でどの程度タッチの授受があったかを比較し，両国間の差異を分析した[7)]。同様に，米韓の間でも18部位の各々に対して有意差があるか否かについて分

Table 4　身体接触の部位別割合－両親や友人によって触られた人の％－

	Mother						Father						Same-sex friend						Opposite-sex friend					
	M			F			M			F			M			F			M			F		
	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K
1	19***	74	52***	58***	78	67*	13***	47	32**	27***	69	49***	32**	49	36*	49**	65	59	63***	86	55***	62***	89	68***
2	8***	59	52	31***	52	**65***	4***	23	21	6***	52	31***	13***	34	24*	28	31	**49****	60***	90	58***	49***	89	55***
3	4***	60	15***	12***	60	24***	5***	46	13***	4***	59	11***	13***	46	25***	9***	60	21***	42***	88	36***	35***	94	35***
4	14***	54	28***	32***	55	36**	11***	45	26**	13***	48	21***	31***	55	40*	37*	50	37*	49***	84	50***	46***	82	41***
5	18***	71	53**	52***	75	64*	12***	59	36***	19***	70	37***	40***	70	65	66	75	79	72***	86	72***	70***	89	55***
6	15***	73	51***	51***	76	79	9***	61	32***	18***	74	45***	29***	71	57*	69*	80	86	64***	89	82***	69***	88	74***
7	18***	82	76	49***	82	83	11***	86	50***	17***	77	65*	40***	87	58***	61***	82	89	73***	92	87***	69***	89	76***
8	4***	29	13***	5	9	13	3***	24	11**	0**	6	2	18***	41	24**	13*	6	**13***	48***	76	33***	36***	52	15***
9	5***	27	23	15	21	**37****	4***	21	13	2***	21	10**	18***	41	31	17	21	**34****	43***	78	41***	42***	72	27***
10	1	2	1	1	2	6	1	2	1	0	0	2	7	9	9	0	1	2	42***	50	24***	35**	44	11***
11	5***	21	14	10*	19	**32***	3***	16	11	2***	16	8*	9***	31	15**	6***	22	20	34***	72	31***	36***	69	21***
12	3***	24	10**	7***	30	24	2***	19	9*	3***	22	11**	6***	35	7***	2***	25	11**	27***	73	21***	23***	79	18***
13	4***	26	13**	13***	29	34	3***	19	9**	7***	21	17	6***	34	8***	2***	24	14*	28***	71	18***	25***	72	19***
14	3***	30	17**	9***	31	27	3***	20	5***	5***	25	21	5***	33	6***	1***	27	10***	25***	67	18***	17***	67	16***
15	12***	64	48**	50***	71	62	8***	43	35	21***	62	55	27***	47	41	46***	71	55**	60***	86	56***	54***	94	69***
16	29***	67	54*	53***	76	60**	23***	57	50	26***	67	52**	46*	58	**69***	49***	74	67	55***	85	64***	62***	92	63***
17	15***	50	50	38***	59	64	12***	34	38	9***	51	44	26**	45	47	34***	55	58	49***	83	55***	53***	83	52***
18	4**	13	**32****	9*	17	**44****	3**	11	13	4**	13	10	14	22	24	7*	14	**26***	37***	54	28***	27***	58	18***
M	10***	46	33***	28***	47	46	7***	35	23***	10***	42	27***	21***	45	33***	28***	44	41*	48***	78	46***	45***	78	41***

note. J：日本，A：米国，K：韓国，M：男子大学生，F：女子大学生，* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

JM：136，JF：180（JM：67，JF：81），AM：168，AF：140，KM：151，KF：174（KM：78，KF：91）

1 列目の 1－18 の番号は，Figure 1 の身体部位を表す。異性親友の部分の分析においては，異性の親友がいないと答えた人は分析から除いた。

析を行い，Table 4 と Table 5 の結果を得た。

Table 4 の数値は，身体の各部位ごとに，母親，父親，同性の親友，異性の親友から自分が過去 1 年間にタッチされたと答えた人の割合（%）を表している。例えば，左端の 3 列は日本（J），米国（A），韓国（K）の順に，母親からタッチされたと答えた男子大学生（M）の割合（%）を表しており，次の 3 列は日本（J），米国（A），韓国（K）の順に，母親からタッチされたと答えた女子大学生（F）の割合（%）を表している。以降，父親，同性の親友，異性の親友についても同様である。

Table 5 の数値は，Table 4 とは逆に，各相手に対し，自分が過去 1 年間にタッチしたと答えた人の割合（%）を表している。このように，各対象ごと，かつ調査協力者の性別ごとに，中間列に米国データを配置し，日本と韓国のデータを各々米国データの左と右に並べ，日米間で有意差があると認められる場合には日本の数値の右上にアスタリスクをつけ，米韓の間で有意差がある場合には韓国の数値の右上にアスタリスクをつけている。なお，有意差の検定においては，各部位ごとの度数を対象にカイ二乗検定を行っており，検定後に各度数を％に直したものを Table 4 と Table 5 に載せている。

まず，日米比較の結果から検討していきたい。もっとも大きな違いは，対象や部位を選ばず（胸，腹，お尻，大腿部など，いわゆる性的な意味を持つ部位を除く），すべての対象のほとんどすべての部位へのタッチにおいて，タッチ水準に大きな差が出ていることである。それらの差はいずれも米国の方が日本を上回るものであり，その逆，すなわち日本が米国を上回る差が出ている対象や部位は皆無に近かった。半世紀前の米国に比べ，日本の身体接触の度合いが如何に低いかを物語る結果といえる。Table 4 の最後の行には，おおよそのタッチの水準を比較するために，18 部位各々の割合を平均した総

Table 5　身体接触の部位別割合－両親や友人を触った人の％－

	Mother						Father						Same-sex friend						Opposite-sex friend					
	M			F			M			F			M			F			M			F		
	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K	J	A	K
1	9***	63	21***	33***	77	52***	6***	35	11***	14***	65	26***	35*	50	42	49**	68	59	76***	89	71***	62***	92	60***
2	4***	54	25***	21***	51	51	2***	22	7***	5***	50	22***	15***	33	28	26	31	**51****	61***	93	65***	49***	93	52***
3	4***	54	18***	9***	59	25***	2***	40	8***	6***	56	16***	11***	48	25***	9***	54	23***	46***	89	41***	35***	91	31***
4	13***	35	31	31***	54	41*	15***	43	21***	15***	52	22***	34**	53	42*	34**	49	39	54***	88	46***	46***	83	32***
5	18***	70	60	57**	72	79	17***	59	38***	28***	72	51***	45***	71	65	64*	75	79	61***	88	68***	70***	89	70***
6	13***	74	68	57**	73	**89****	13***	61	39***	26***	75	63*	28***	71	58*	70	79	**92****	55***	89	81***	69***	90	82***
7	18***	83	75	55***	78	**87***	13***	86	51***	27***	82	63***	44***	88	55***	66**	81	86	79***	93	88***	69***	90	76***
8	3	8	3	4	6	**14***	4***	23	9***	1***	22	9**	29***	39	28*	12	6	10	46***	73	33***	36***	70	23***
9	8	15	15	17	24	**52****	6***	20	18	11***	27	27	21**	39	34	20	20	**33****	45***	81	46***	42***	72	36***
10	2	1	3	1	2	6	2	1	1	1	0	1	6	10	9	1	1	5*	43***	53	29***	35*	42	11***
11	3**	12	17	12	15	**40****	4**	16	19	5**	15	13	10***	31	22	7**	19	21	46***	78	33***	36***	62	20***
12	2***	15	21	7**	18	**36****	2***	19	16	4***	20	15	6***	36	10***	2***	25	13**	36***	79	24***	23***	70	14***
13	4***	18	25	11*	21	**44****	2***	19	19	7**	18	21	4***	36	11***	3***	23	13*	31***	77	26***	25***	68	14***
14	2***	21	24	10**	24	**39****	3***	21	15	6***	25	16*	3***	34	7***	1***	28	7***	28***	73	21***	17***	65	11***
15	12***	49	21***	29***	66	45***	5***	36	12***	12***	56	26***	24***	48	50	39***	67	59	67***	88	69***	54***	89	58***
16	25***	61	64	53**	71	70	23***	57	50	33***	72	51***	47	57	**70***	48**	67	69	63***	89	74***	62***	88	63***
17	12***	34	42	38*	50	61	15***	39	38	24***	52	48	28**	43	50	38*	52	59	51***	88	54***	53***	82	54***
18	4	6	5	7*	14	22	1*	8	4	3	5	9	12*	21	28	9	12	**30****	45***	61	33***	27***	48	19***
M	9***	37	30***	25***	43	**47****	8***	34	21***	13***	42	28***	22***	45	35***	28***	42	42	52***	82	50***	45***	77	40***

note. J：日本，A：米国，K：韓国，M：男子大学生，F：女子大学生，* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

JM：136，JF：180（JM：67，JF：81），AM：168，AF：140，KM：151，KF：174（KM：78，KF：91）

1 列目の 1－18 の番号は，Figure 1 の身体部位を表す。異性親友の部分の分析においては，異性の親友がいないと答えた人は分析から除いた。

無断転載禁止

平均割合を示している。母親からのタッチにおいては，米国男子46%に対し，日本男子は10%という結果となっており，日本男子は米国男子の1/4から1/5程度のタッチ水準にとどまっている。女子の場合は，母親からのタッチにおいて，米国女子47%に対し日本女子は28%で，日本女子は米国女子の6割程度のタッチ水準を示している。このような傾向は，Table 5に見るように，母親に対してタッチをする立場になってもほとんど変わらない。

日本のタッチ水準は米国のタッチ水準の何%かという観点から，さらに父親，同性の親友，異性の親友のデータを分析すると，父親からのタッチについては男女ともに2割台，同性の親友からのタッチについては男子は5割弱，女子は6割強，異性の親友からのタッチについては男女ともに6割前後という結果になっており，いずれも大きなギャップが認められる。

一方，韓国の場合は若干事情が異なる。まず，母親からのタッチにおいては，米国男子46%に対して韓国男子は33%となっており，韓国男子のタッチ水準は米国男子のそれの7割強ということになる。女子においては，母親からのタッチ水準がさらに高く，基準となる米国とほぼ同等の数値を示している（米国女子47%，韓国女子46%）。さらに父親，同性の親友，異性の親友のデータを分析すると，父親からのタッチにおいては男女ともに65%前後，同性の親友からは男子は7割強，女子は9割強，異性の親友からは男子は6割程度，女子は5割強という結果を示している。異性の親友を除けば，両親や同性の親友からのタッチ水準は相対的に高いといえるが，とりわけ，母親から女子学生へのタッチ，女子の親友から女子学生へのタッチ水準は米国の水準とほぼ互角といえる。部位別にみても，顔，胸，腹，大腿部，尻などについては，韓国の方がむしろ米国を上回るタッチ水準を示しており，韓国の女子学生のタッチ水準の高さが目立つ。韓国女子におけるこのような高水準のタッチは，逆に女子学生が母親や同性の親友にタッチをする立場においてもそのまま表れ，母親へのタッチは米国の109%（米国女子43%，韓国女子47%），同性の親友へのタッチは100%（米国女子42%，韓国女子42%）という結果が出ている。米国データが半世紀前のものであることを踏まえると，近年のインターネットやSNSの進展に伴い米国においてもタッチによるコミュニケーションが減少している可能性を排除できない（Hutchinson & Davidson, 1990）。それにもかかわらず，半世紀も前の米国の水準と同等，あるいはそれを上回るタッチ水準が韓国女子において保たれているという事実は非常に興味深い発見事項の一つである。

以上，米国データを基準とした日米・米韓の比較から，日米間には大きな差が開いている反面，米韓の間の差は相対的に小さく，とりわけ女子学生の場合，母親や同性の親友との間で米国の女子と韓国の女子のタッチ水準がほぼ同等のものであるという結果が導かれた。米国データを介在させた3ヵ国比較からも，韓国の身体接触の度合いが日本のそれをかなり上回ることを確認することができた。ただ，異性の親友とのタッチ行動については，日韓間でほとんど差は存在せず，タッチ水準においても米国の水準をはるかに下回っていることは注目に値する。両親や同性の親友とのタッチ行動と異性の親友とのタッチ行動の異質性を物語る結果といえる。

考　察

ここまで，日本と韓国の大学生を対象に，両者のタッチ水準を調査･比較することによって，身体接触の度合いにおける文化的な差を可視化してきた。アジア文化圏に属する日本と韓国という2つの国の文化がコミュニケーションの観点からはどのくらい特殊な文化であるかを知るために，分析3では，敢えて半世紀前のJourard（1966）の研究データを介在させ，それと比較する形で分析を進めた。この50年間，米国の文化もかなりの変化を遂げている可能性があるため，現在の日本と韓国のデータと直接比較する

ことが必ずしも妥当なものであるとはいえないが[8]，いずれにしても，半世紀前の米国データと比較した場合，日本の大学生の身体接触の度合いは非常に低いレベルにあることが明らかとなった。これは，アメリカ人が日本人より2倍も多く身体接触を用いているとしたBarnlund (1973) の研究結果にも近いものである。他方，韓国の大学生は，米国データにかなり近い水準の身体接触の度合いを報告しており，とりわけ韓国女子においては，母親や同性の親友からのタッチが米国の水準と同等のものであったことは興味深い。韓国女子のタッチ水準の高さは分析1と分析2においても鮮明に表れており，同じアジアの2つの国が実はかなり異質なコミュニケーション環境を保っている可能性を示唆している。

米国との比較で日本のタッチ水準が低いことについては，Barnlund (1973) が次のように指摘している。「日米とも幼児のときには親密さの高い身体的接触があるが，それが成人の初期に異なった方向に進むのである。アメリカでは継続して身体的接触を保ち，接触が自分の態度を表す重要な方法として続くが，日本では，児童時代の後は，身体的親密さが急激に減少し，内面の気持ちを表現する方法として，接触行為が用いられる範囲が少なくなる」(Barnlund, 1973, pp.119-120)。一方，韓国に目を転じると，Barnlund (1973) が米国の特徴として述べている部分が概ね韓国にもそのまま当てはまる。すなわち，幼児期の高い身体的接触が，成人になるまで自分の態度を表す重要な方法として続くのである。韓国では，タッチを促す風土はあっても，それを抑制するような風土はそれほど見当たらず，結果的にタッチ行動に寛容的な文化が保たれている。

このような現象は，曺 (2001, 2010) の主張するゼロディスタンス (zero distance) 論とも通じるものがある。とりわけ，韓国女子の母親や同性の親友とのタッチ水準の高さが際立っているが，ゼロディスタンス論の考え方は，親しみの度合いと対人距離が反比例するというものである。すなわち，親しみが高まるほど対人距離が縮むことになり，親しみが極大化したときには対人距離が限りなくゼロに近づくというわけである。対人距離がゼロということは，親しみを感じる相手に触れている状態を指すので，もしもタッチに対する外部的な制御がなく，自由に自分の気持ちを表現できる環境さえ整っていれば，親しみの表れとして人はその相手にタッチしたり，あるいはタッチされることによって自分も相手から親しみを持たれていることを確認し，安心するのであろう。韓国の場合，街に出ると，女性同士が腕を組んだり，手を繋いだりして歩く姿をよく見かけるが，そのような光景は，韓国のコミュニケーション文化がゼロディスタンス論の当てはまりが良い文化であることの裏付けともとれるのである[9]。

文化によって身体接触の度合いに差があることを検証したが，このような発見の異文化コミュニケーションへのインプリケーションは明白である。身体接触はコミュニケーション手段の一つであるが，それが極力抑制されている文化において如何に有効なコミュニケーションがとれるのか。また逆に，身体接触がコミュニケーションの大きな部分を占めている文化において，身体接触が抑制された文化に慣れ親しんだ人々がどのように有効なコミュニケーションがとれるのか。身体接触が抑制されている文化においては，タッチ行動は不快や嫌悪をもたらすものとして認識される可能性があり，逆に身体接触に寛容的な文化においては，相手からの不十分な身体接触が不信感や距離感を生じさせる要因となる可能性もある。このような相違に対する理解が不十分なまま異文化間コミュニケーションが図られると，しばしばミス・コミュニケーションや誤解が生じることになり，お互いが相手から傷つけられかねない。

そのような事態を回避するためには，いずれの立場からも，有効なコミュニケーションを実現するための努力が必要といえるが，その際にまず必要なのは，文化による身体接触行動の相違を理解することであろう。本研究によって得

無断転載禁止

られたデータと明らかとなったいくつかの結論や発見事項が，有効な異文化コミュニケーションのためのヒントとなることを期待している。

［付　記］

文部科学省科学研究費補助金研究H23-25年度基盤研究C，課題番号23520727（研究代表，曺美庚），H26-28年度基盤研究C，課題番号 26503016（研究代表，曺美庚）の助成を受けた。

注

1）本研究のデータの一部は，日本心理学会第79回大会と第30回異文化コミュニケーション学会年次大会で発表している。

2）調査協力者の内訳は，18歳から22歳までの男子大学生168名，女子大学生140名となっている。

3）現代人は触覚的な飢えにさらされていると指摘する研究者もいる（Gallace & Spence, 2010）

4）Jourard（1966）の分類のうち，目・鼻・口・耳の４つの部位を一つに，首の前と後ろを１つに，大腿部の前と後ろを１つに，脚の前と後ろを１つにそれぞれ統合し単純化することによって，回答者の利便性を高めた。

5）Jourard（1966）やBarnlund（1973）は，主として「タッチされる」ほうの身体接触をもとに分析結果を述べている。

6）分析３で用いられる日本と韓国のデータは，身体図に基づいた分析２で使われたデータと同様のものである。

7）調査に用いられた身体図は，人間の身体を24分割したJourard（1966）のモデルを18分割に修正したものである。そのため，Jourard（1966）のデータのうち，統合された部位，すなわち，顔（目・鼻・口・耳），首（前と後ろ），太腿部（太腿部の前と後ろ），脚（前と後ろ）については，統合前の部位のうち割合（%）がもっとも高い部位の%を統合された部位のタッチ水準と見なした。例えば，顔の場合，統合前の部位別割合が目31%，鼻41%，口54%，耳41%であったので，このうち割合がもっとも高い54%を統合された顔のタッチ水準と見なした。

8）もっとも，Jourard（1966）の調査から10年ほど後に行われたRosenfeld et al.（1976）の調査結果は，異性の友人を除けば，各部位ごとのタッチ水準，すなわち身体接近度にそれほど大きな変化は生じていないことを示唆するものである。

9）また，相手との心理的な距離を縮める目的で，意図的に相手に触れることも考えられる。この場合，タッチは親しみの表れというよりは，親しくなりたいという願望の表れとして解釈可能であろう。

引用文献

App, B., McIntosh, D. N., Reed, C. L., & Hertenstein, M. J.（2011）. Nonverbal Channel Use in Communication of Emotion: How May Depend on Why. *Emotion,* ***11,*** pp. 603-617.

Argyle, M.（1988）. *Bodily Communication*（*2nd edn.*）Madison: International Universities Press.

Barnlund, D. C.（1973）. Public and Private Self in Japan and United States, Simul Press,（西山千（訳）（1973）. 日本人の表現構造　サイマル出版会）

Barnlund, D. C.（1975）. Communication styles in two cultures: Japan and the United States. In A. Kendon, R. M. Harris, and M. R. Key（eds）*Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction,* The Hague: Mouton.

曺美庚（2001）.「日本人と韓国人の異文化コミュニケーション」『人間環境学入門』中央経済社. pp. 100-109.

曺美庚（2008）.「スキンシップ許容度とコミュニケーション距離―日本人大学生の分析結果を中心に」『言語文化論究（九州大学大学院言語文化研究院）』**23**　pp. 43-61.

曺美庚（2010）.「人関係における親密さとスキンシップ許容度―韓国人大学生の分析結果を中心に」『比較社会文化（九州大学大学院比較社会文化学府）』**16**　pp. 1-14.

Cho, M., & Kugihara, N.（2013）. The impact of the Big Five personality traits on the propensity to touch: based on a survey of university students in Korea. *Korean Psychological Association conference book,* p. 128.

曺美庚・釘原直樹（2013a）.「パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響―日本人大学生の調査から」『日本心理学会第77回大会発表論文集』p. 19.

曺美庚・釘原直樹（2013b）.「パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響―日本の中学生とその保護者に対する調査分析を中心に」『日本社会心理学会第54回大会発表論文集』p. 435.

大坊郁夫（1998）.『しぐさのコミュニケーション―人は親しみをどう伝えあうか』サイエンス社.

Gallace, A., & Spence, C.（2010）. The science of interpersonal touch: An overview, *Neuroscience and Biobehavioral Reviews,* **34**, pp. 246-259.

原沢伊都夫（2013）.『異文化理解入門』研究社.

Hertenstein, M. J., Holmes, R., McCullough, M., & Keltner, D.（2009）. The communication of emotion via touch. *Emotion,* **9**, pp. 566-573.

Heslin, R., Nguyen, T. D., & Nguyen, M. L.（1983）. Meaning of Touch: The case of touch from a stranger or same sex person, *Journal of Nonverbal Behavior,* **7**, pp. 147-157.

無断転載禁止

Hutchinson, K. L., & Davidson, C. A. (1990). Body accessibility re-revisited: The 60s, 70s and 80s, *Journal of Social Behavior & Personality,* **5**, pp. 341-352.

Jourard, S. M. (1966). An exploratory study of body-accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology,* **5**, pp. 221-231.

Jourard, S. M., & Rubin, J. E. (1968). Self-disclosure and touching: A study of two modes of interpersonal encounter and their inter-relation. *Journal of Humanistic Psychology,* **8**, pp. 39-48.

Montagu, A. (1978). *Touching: The Human Significance of the Skin* (*2nd edn.*). New York: Harper & Row, Publishers.

Nguyen, T. D., Heslin, R., & Nguyen, M. L. (1975). The Meaning of Touch: Sex Differences. *Journal of Communication,* **25**, pp. 92-103.

Nguyen, M. L., Heslin, R., & Nguyen, T. D. (1976). The Meaning of Touch: Sex and marital status differences. *Representative Research in Social Psychology,* **7**, pp. 13-18.

Rosenfeld, L. B., Kartus, S., & Ray, C. (1976). Nonverbal communication: Body accessibility revisited. *Journal of Communication,* **26**, pp. 27-30.

無断転載禁止